

取材日：2014年7月16日



糖尿病



福岡県久留米市、
柳川山門周辺地区

「患者さんの前では皆平等」の精神で、 笑顔で地域に広める糖尿病療養指導の輪。

Point of View

- ① 専任コーディネーターを介した循環型糖尿病地域医療連携パスシステムの運用
- ② メディカルスタッフ同士の地域交流の活性化
- ③ 地域ごとの多職種連携コミュニティ活動の推進と専門医によるサポート
- ④ 糖尿病診療に関心を持つ、かかりつけ医を増やすための地域活動

社会医療法人雪の聖母会
聖マリア病院副院長
布井 清秀先生

社会医療法人雪の聖母会
聖マリア病院糖尿病内科診療部長
佐藤 雄一先生

社会医療法人雪の聖母会
聖マリア病院糖尿病地域医療支援センター看護師
川述 里美氏

はるた医院院長
春田 泰伸先生

津末医院院長
津末 美和子先生

シームレスな連携をめざす 糖尿病医療の支援センター

福岡県久留米市及び隣接する筑後地方では、全国に先駆けて地域糖尿病療養指導士（以下、LCDE）の認定が行われ、糖尿病地域医療連携構築とその担い手であるLCDEの育成に積極的に取り組んできた。

牽引役である社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院（以下、聖マリア病院）は、2011年1月に専任コーディネーターを配置した糖尿病地域医療支援センター（以下、支援センター）を設立。糖尿病連携パスシステムを用いた循環型医療連携のサポートや、糖尿病に関するかかりつけ医検索システムの構築、かかりつけ

医を巻き込んだ他科とのワールドカフェ式連携講演会、出前方式の糖尿病療養指導サポートなどを通じて、地域における糖尿病診療のレベルアップに貢献している。

「我々が糖尿病地域医療連携に着手したのは約10年前、当初は登録医を主な対象とした研修会で連携をめざしましたが、現実には厳しく密な連携を構築するにはあたりませんでした。その後、小郡市の嶋田病院に赴任された赤司朋之先生が、専任コーディネーターの配置と循環型連携パスの活用による理想的な2人主治医制を構築しました。そこで、我々もこの事例を手本にして支援センターを立ち上げたのです」（布井先生）
「糖尿病診療においてより踏み込んだ

積極的な連携のために何が必要かを考え、開設されたのが支援センターです。専任コーディネーターの存在により、専門医とかかりつけ医の間にシームレスで互いに顔の見える連携が生まれました」（佐藤先生）

糖尿病療養指導を広める 専任コーディネーター

支援センターによる糖尿病地域医療連携の核となる取り組みは、連携パスシステムを用いた循環型医療連携だ。2人主治医制で連携する患者に連携パスの導入が決まると、医師とともにコーディネーターがかかりつけ医を訪問して連携パスシステムの説明を行い、同意を得る。連

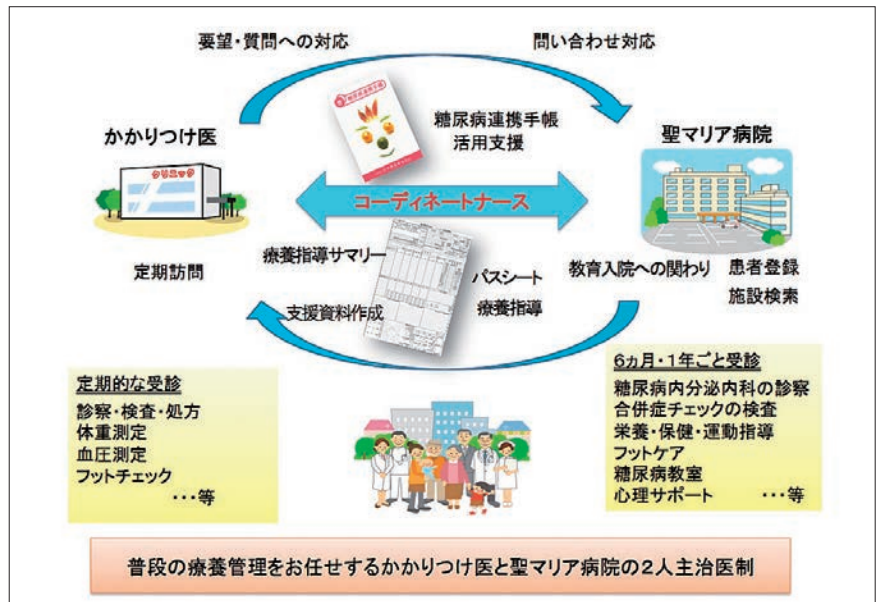
携パスシステムは1クール原則6ヵ月で、年に2回同院に受診する以外は、かかりつけ医にて診療、検査、投薬、生活指導を行う。コーディネーターは1クールに2回かかりつけ医を訪問し、「申し送り」と「再受診案内・状況確認」を行って橋渡し役となる（【資料1】）。

「私は支援センター開設に際して『患者さんの前では皆平等』を基本精神に掲げ、これを実践できればチームがまとまり、地域医療の基本が育まれると考えました。そこで要となるコーディネーターは、まず患者さんの気持ちを理解できること、そして、専門医とかかりつけ医の両方の立場を理解し、多くのチーム医療スタッフを巻き込むことが求められます。一方、川速さんはご自身が1型糖尿病患者でありながら、一般病院や糖尿病専門クリニック、眼科診療所など多様なフィールドで看護師として糖尿病に関わった経験の持ち主。コーディネーターは彼女しかいないとの思いで、当時は県外で勤務されていたのを何度もお願いし私たちの仲間になっていただきました」（布井先生）

川速氏が当時は振り返る。「不安はありましたが実際に業務を始めると、ともに学び、患者情報を共有する多くの方から元気をいただき幾度もの喜びを得ることになりました。患者でもある私がこの仕事を引き受けたのは、地域で活躍する多くのスタッフの方々に糖尿病診療にたずさわる面白さを知ってもらいたいとの思いからでした。『糖尿病とともに生きること』を理解してくれるスタッフが存在する安心感は患者さんにとっても幸せなことであり療養継続の力になります。自ら地域に出向き、試行錯誤しながら協働し、共感できる仲間を増やせば地域全体

【資料1】

循環型糖尿病地域医療連携の流れとコーディネーターの役割



での療養指導の向上につながるはず。それは支援センターの目的に合っていると信じます」（川速氏）

春田先生は、川速氏の活動がかかりつけ医にも大きなインパクトを与えたと感じている。「私は循環器が専門ですが、糖尿病に興味を持ち勉強して診療しています。そんな私の影響からか、当院のスタッフも糖尿病に関心を持つようになりました。けれども、LCDEの取得をすすめても首を縦に振ってはくれませんでした。そんな中、当院に川速さんが来てくれるようになり私の不在時でもスタッフとよくコミュニケーションをとり、アドバイスしてくれるようになりました。すると、当院のスタッフ2名が自主的にLCDEを受験すると名乗りを上げてくれたのです。このような輪が広がれば、必ず地域全体の糖尿病診療のレベルが向上するだろうと期待しています」（春田先生）

津末先生もコーディネーター

の活動に大きな意義を感じている。「画一的な連携パスの運用だと実地医家の臨床に馴染まないことがありますが、互いの立場を理解するコーディネーターが介在することで、スムーズな連携が可能になります。患者さんは検査を怖いと感じていたり、医療費を心配していたり、提供書に書けないさまざまな不安を抱えています。コーディネーターはこれらの情報を把握し、患者さんにフレキシブルでやさしい対応をして治療の選択をサポートしてくれます」（津末先生）

全国に先駆けてスタートし
軌道に乗せたLCDE認定

福岡県は全国に先駆けて糖尿病療養指導に着手し、筑後地方では佐賀県と共同で1997年にLCDE認定を開始。現在では600名ものLCDEが認定され、地域で活躍している。「糖尿病療養指導は、1980年代から米

国で注目されるようになり、我が国では1996年に福岡市で開催された日本糖尿病協会の総会が普及のきっかけとなりました。同年、福岡県では北九州市がLCDE認定を開始し、我々も翌年に事業をスタートさせました」(布井先生)

構想から事業開始まで、わずか1年。これほど速やかに制度を立ち上げ、着実に発展できたのは、地域に人材とノウハウ、糖尿病療養指導に対する高い関心が蓄積されていたからにほかならない。

「私は1991年に当院に赴任し、学際的チームアプローチによる患者教育に取り組んでいましたので、専門性の高いメディカルスタッフがすでに育っていました。また、地域で活躍する多くの方に関心を持ってもらうため、東京女子医科大学病院糖尿病センター長を退官された平田幸正先生に顧問になっていただき、10回連続の公開講座を開催しました。毎回100名以上の参加があり、着実に関心の輪が広がっていきました。我々が境界型糖尿病患者に対するIGT教室を行った社員約1万人の企業では、血圧や血糖値の改善が見られ、3年間で約1億4,000万円の糖尿病関連医療費が削減されました。LCDE発足当初は運営資金に苦労しましたが、我々が編集した『糖尿病療養指導士模擬試験問題集』がCDEをめざす全国の多くの方に購入いただくことになり何とか解消されました。これらの成果により、自信を持ってLCDE制度を推進できるようになりました」(布井先生)

「我々は当院に赴任する以前、大学病院に勤務していたころから糖尿病療養指導にかかわり、10年もの間、実績を積み重ねてきました。まさに機が熟したという思いで、一連の取り組みを一気に立ち上げたのです」(佐

藤先生)

地域の隅々まで LCDEを浸透させる

事業が軌道に乗りLCDE認定者が着実に増加する一方で、近年その偏在が新たな課題として顕在化した。「私が訪問した医療機関の中で、LCDEが在籍していたのは1施設しかありませんでした。LCDEは基幹病院に多く在籍していますが、実地医家に在籍するLCDEはきわめて少ないのが現状です」(川速氏)

柳川山門周辺地区では、津末先生を中心に2000年より文殊の会(同地区のLCDEの会)を発足、仲間を増やす取り組みをしてきた。

「LCDE認定試験直前に、その年受験するスタッフを招き、世話人と一緒に問題集を勉強する試みを継続しています。そうすることで、彼らが学ぶ新しい知識を世話人も得ることができ、ともに学び、コミュニケー

ションを密にすることで、認定直後から積極的に地域活動に協力してくれるLCDEが誕生するのです。また、LCDE認定を得るには3年間で10時間分以上の講演会への受講が必要ですが、柳川市からだど久留米市内まで車で約1時間かかり、業務終了後の受講が容易ではありません。そこで2003年より独自に講習会を開催するようになりました。医師会や地域の病院も協力的で、無償で会場をお借りし、医師会事務局よりチラシ配布もお願いしています。さらには、内科小児科医会のお誘いで2006年より一緒に地域活動をするようになりました。翌年には日本糖尿病協会(以下、日糖協)の分会をつくり、先生方にも入会いただいています」(津末先生)

かかりつけ医の隅々までLCDEへの関心を広めるべく、筑後地域全体として新たな取り組みも開始された。「地域のスタッフの方にLCDEに関心を持っていただくには、まず、糖尿

【資料2】

2012、2013年度「実地医家のための糖尿病セミナーin 筑後」の概要

	テーマ	講座1	講座2	ランチョンセミナー	分かりやすいインスリン治療講座
第1回	患者さんの心理	食事療法のコツ	糖尿病と肝臓	糖尿病患者の心理(食行動異常)	外科領域入院中の患者管理と強化療法について学ぶ
第2回	セルフモニタリング	セルフモニタリング	血糖管理	スローエイジングに根差した糖尿病治療アルゴリズム	周期の管理 外来への変更 混合注射とBOT
第3回	高齢者糖尿病	高齢者糖尿病の薬物療法	糖尿病と心血管疾患	高齢者糖尿病と認知症について	高齢者のインスリン治療(BOTの色々)
第4回	合併症管理	重症糖尿病網膜症の治療	糖尿病と禁煙	糖尿病とがんリスクとの関連について	ハンディキャップのある人に対する注射の指導
第5回	療養指導のコツ	糖尿病腎症	糖尿病足病変	CGMデータから実地医家で活用できる糖尿病治療を考える	カーボカウント法
第6回	かかりつけ医における糖尿病教室	計画的な糖尿病疾病管理	効果的な運動療法	西東京地区における糖尿病地域連携システム	6回のまとめ



後列左から川速氏、布井先生、佐藤先生、前列左から津末先生、春田先生

病診療に関心のあるかかりつけ医を増やすことが重要です。そこで、日糖協が認定する糖尿病療養指導医を拡大すべく、『実地医家のための糖尿病セミナー in 筑後』（【資料2】）を立ち上げました。この講習会は、実臨床に即したテーマを設定したうえで“かかりつけ医が知りたいこと”を抽出し、1ラウンド6回シリーズで継続的に糖尿病診療を学ぶ“かかりつけ医目線の講習会”です。テーマや具体的なカリキュラムは春田先生と津末先生に相談し、非常に魅力的な内容となりました」（布井先生）

カリキュラムの検討に協力した津末先生は、自身が研修目的で聖マリア病院の回診に参加した際、布井先生が患者やスタッフ、研修医にアドバイスしていた言葉が今回の検討で非常に参考になったという。

「かかりつけ医の立場からすると、糖尿病に対する素朴な疑問や、人前で質問するのが恥ずかしいと感じるような基本的な知識について、わかりやすく解説していただくことが関心を持つ第一歩となります。あえて難解な話を排し、インスリン治療の基本的なノウハウや考え方、かかりつ

け医が苦慮する状況を解決する具体的な方法など、基本的で実践的な話を専門医の先生方が丁寧にレクチャーをしてくだされれば、非常に有意義だろうと考えました」（津末先生）

すでに2ラウンド12回の講習を終え、参加者は累計238名、のべ725名と盛況な会となった。多くの診療科の医師に加えて、歯科医も多数、参加する。「かかりつけ医の興味や関心、疑問はかかりつけ医に聞かなければわからないことを痛感しました。日曜日の10時から14時前までで開催し、ゆとりのあるタイムスケジュールでじっくり質問できることもニーズに合っているのだと思います」（佐藤先生）

実地医家に所属するLCDEを増やし、偏在を解消するには多様な角度からアプローチし努力を継続することが重要だと春田先生は強調する。「地域全体では糖尿病に関心を持つ医師を増やし、各エリアでは、津末先生が柳川で取り組んでいる講習会やコミュニティーの形成などの活動を発展させていく必要があるでしょう。そして、川速さんが取り組んでいるようなスタッフ同士のネットワークの活性化がきわめて重要です。異なる職場、職域でがんばっているスタッフが交流し、互いが刺激しあうことで糖尿病への関心が生まれ、LCDEに挑戦する新たな仲間が増える。そんな複合的な取り組みが重要になるでしょう」（春田先生）

最後に、地域の課題を克服するために必要なことと、この地域の強みについて布井先生にうかがった。「糖尿病にかかわる問題を克服する鍵は、LCDEの活躍の場を地域の隅々にまで広げることと、専門医とかかりつけ医が役割分担をして協力し合うことにつきます。当院では、糖尿病病ホスピタルマネジメント・アンド・ケアチームを立ち上げ、糖尿病の専門病棟だけでなく、すべての病棟にLCDEが在籍する状況をめざして活動を始めました。

糖尿病診療は医療と療養指導のサンドイッチ体制で臨むべきです。そのためにはLCDEの自立が不可欠で、我々はこれを全面的に応援しています。また、かかりつけ医で糖尿病診療に熱心な先生が増えればより高度な連携医療が可能になるでしょう。

立場や職域を越えて遠い目的を共有し、知恵を出し合い、笑顔で力強く前進する仲間がたくさんいる。このことが、この地域の大きな財産であることは間違いないでしょう」（布井先生）

社会医療法人雪の聖母会
聖マリア病院

〒830-8543
福岡県久留米市津福本町422
TEL：0942-35-3322

医療法人春光会
はるた医院

〒830-0051
福岡県久留米市南4-1-18
TEL：0942-22-8100

医療法人 津末医院

〒832-0816
福岡県柳川市三橋町久末809-1
TEL：0944-72-2516